

かつての秘境も…

— ザイール河源頭流域踏査 —

1982年

松原 保

〈計画の発端〉

我部にとって、アフリカ大陸へ遠征隊を送り出すのは初めてでした。その為、お世話になった多くのアフリカ経験者の方々に対し、厚く御礼申し上げます。

この計画は1980年に始まった。当初はアフリカの河川をボートで下り、大陸に一本の軌跡を残すという水平思考的発想であった。ケニア東端より赤道に沿って西方へ踏破する。そして、ザイール河を下って大西洋へ出るというものであった。

しかし、計画自体が大きすぎ、資金も参加メンバーも少なく、計画を縮小せざるを得ない状態になってしまった。非常に残念で、自分自身も独力で出来ないことにもどかしさを覚えた。

長期間の合宿を行うことにより、就職の時期を逃したり、留年することを恐れてのことと思う。私も大学に於ける勉学の大切さは感じるが、この時期に“アフリカへ行く”ことは、勉学以上に自分にとって“何か大切な事”が待っているように感じたからである。

私と、もう一人の発起人である運本と共に、とにかくアフリカ大陸を目指そうとし、結果的に、ザイール河の源頭流域に的を絞り、河の偵察を兼ね、その周辺を探ってみることにした。

“ザイール河”と言っても、一般的にはあまり知られていないと思う。アフリカ大陸の河と聞けば、思い立つのは、やはりあの有名なナイル河であろう。ザイール河は、その昔、コンゴ河と呼ばれていた。この河の全長は約4600kmもあり、世界第5位、水量から言えば、第2位の大河である。

今回、我々が訪れてきたのは、その源流のチャンベジ河からルアブラ河である(河は大きく見ると一本になるのだが、幾度も名を変える。)しかし、これは一般に、源頭と呼ばれていない。百科辞典を調べてみると、ザイール河の源頭とは、ザイール国内、南東部に端を発するルアラバ河となっている。だが、我々はアフリカの地図を見ているうちに、この河は幾度となく名前を変え、河筋も複雑ながら、ルアラバ河よりさらに距離を延ばせる水系があることに着目した。この水系が、今回の我々の踏査地域である、ルバ・ルアラ・チャンベジ河周辺である。

河の“長さ”という概念から考えると、まさにこちらの方が源頭と呼ばれるのに相応しいものだろう。

＜アフリカ踏査行＞

そろそろ本題である。我々の偵察・探検旅行について述べたいと思う。

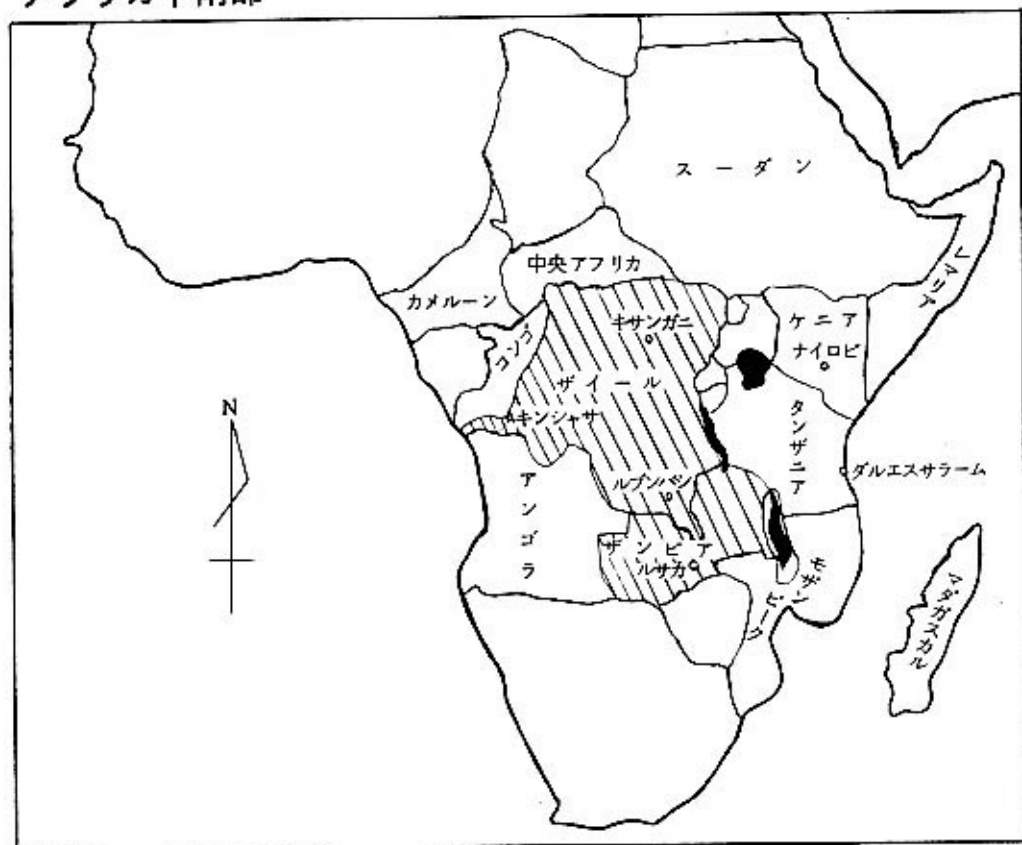
次に行程の概略を示す。

6月14日 成田出発
 6月15日 ダルエスサラーム着
 6月15日～22日 ダルエスサラーム滞在
 6月23日～25日 タンザン鉄道を利用して、タンザニアからザンビアへ入国
 6月26日～29日 ザンビアの首都ルサカ滞在
 30日～7月22日 ザンビア北東部、バングウェル湖・ルアブラ河流域の踏査
 7月23日～28日 ザンビア南西部、ザンベジ河流域踏査。ビクトリア滝見学

29日～8月2日 ルサカ滞在
 8月5日 ザイール入国
 8月6日～10日 シンバ州州都ルブンバシ滞在
 8月11日～24日 ザイール南東部のルアブラ・ムエル湖付近の踏査
 8月25日 ルブンバシ帰着
 8月27日 ザンビア再入国
 9月3日 ルサカ帰着
 9月5日 合宿終了・隊員解散

合宿延べ日数84日。列車、バス、トラック、カヌー、汽船を利用した行程である。

アフリカ中南部



出発前に、我々の予定を大きく遅らせたのは、ザンビアのビザ問題であった。2ヶ月半の間、大使館からの通達を持ったが、結局ちがいが明かずビザを持たずに日本を出発した。成田からPIA（パキスタン航空）で飛び、タンザニアの首都ダルエスサラームに到着した。ダルエスの空港は、これが国際空港とは、思えないほどのおんぼろで、まるでローカルなバスターミナルを思わせるようであった。

ダルエスより、ザンビアへは週一便のタンザン鉄道を利用する。しかし、真夜中に到着した我々は、翌朝が出発日であったため、一週間の待ちとなった。

ダルエルの町並は、崩れかかったビル、路上に数多く出ている露店、広場に品物を置いただけの市場。私の第一印象として、この町はまさに、私のイメージの中にある戦後日本の風景と重なるように思えた。しかし実際には、危険な町だと聞かされていたほどには感じなかった。

翌週、タンザン鉄道で約2000Kmを2泊3日かけてザンビア内の終着駅カピリ・ムボシに着いた。

途中で列車はミクニ国立公園を通過するのだが、車窓から見る数々の動物達は、まさに野性の王国そのものであった。ザンビアに入国する際には、懸念されていたビザも、嘘のように簡単に貰え、入国することができた。

カピリ・ムボシよりルサカまで約200 Km、ここよりバスに乗り継ぐことになる。バス停は、列車より降り立った人の波で、活気が漲っていた。ここで、私達は一つのハプニングに襲われた。バス停の写真を撮っていたところ、ポリスがやって来て駅の詰所に連れて行かれた。根掘り葉掘り、身分、目的を問い詰められ、フィルムを没収されそうになった。一生懸命、悪意のない事を説明した所へ、上役の人の帰って来て無罪放免で許された。

この間、バスに残された荷物が心配だったが、荷物を乗せたバスが我々を待っていてくれたことに、非常に安堵した。

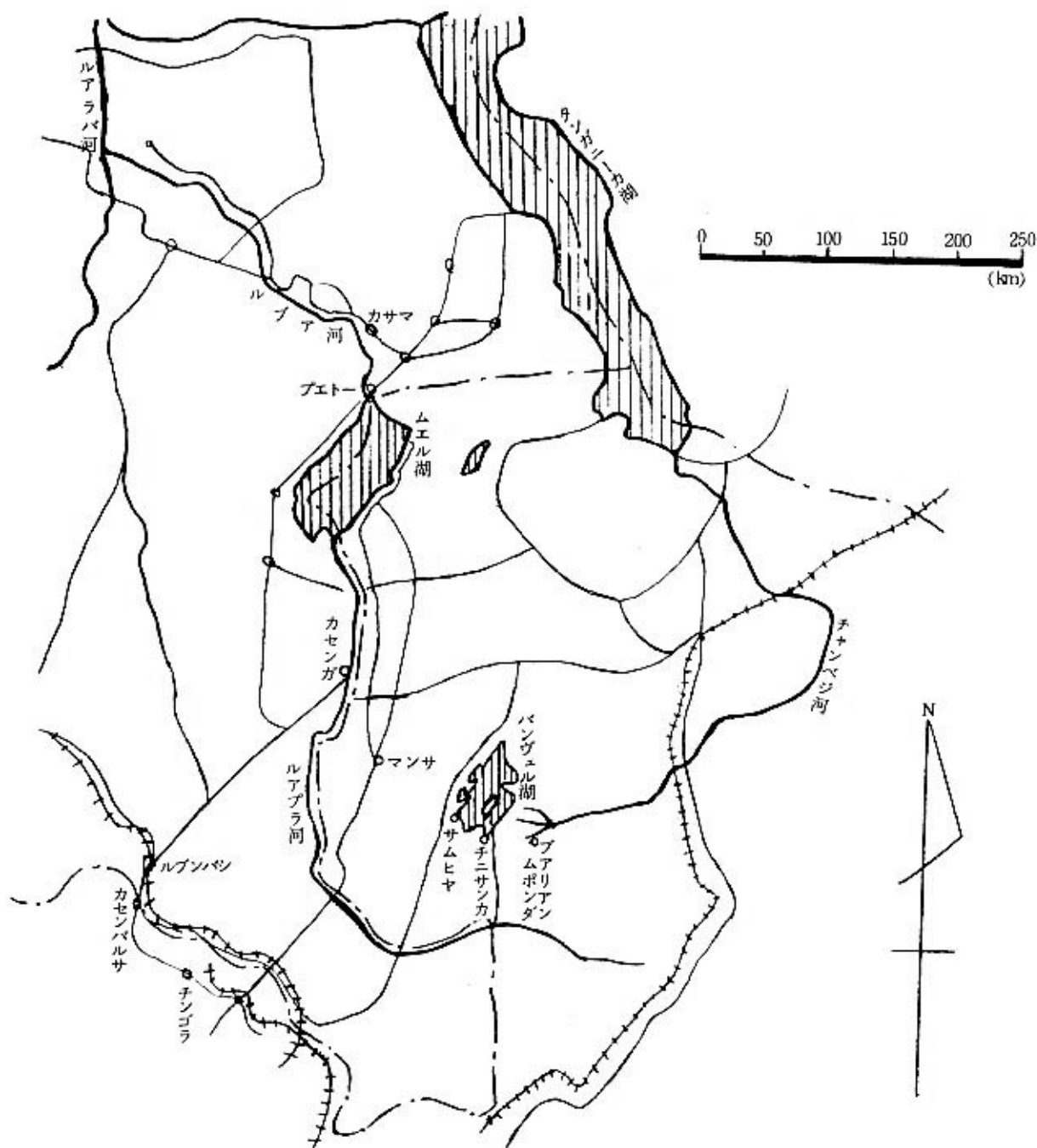
漸くバスが出発した。しかし1 Kmも行かないうちにポリスの検問に会う。先程の事もあり、我々は内心ビクビクしていた。検問の理由も全くつかめず、1時間もの間バスの中に缶詰にされた。他の車が通り過ぎて行くのを見て、イライラさせられた。日本人のように、秒刻みで生活している者とは反対に、こちらの人は何とのおんびりとしている事か。わずかな時間ではあったが、時間に対する観念の違いを感じた。

ルサカに着いたのは、日も落ちようとする頃で、ホテルを捜すのにずいぶん苦労した。と言うのも、予算に合うホテルが見つからなかったのである。タクシーの運転手に捜してもらっている間に、日もとっぷりと暮れ、仕方なく、プール付きの一流ホテルに泊まる事になる。一夜の宿としての出費は非常に痛手であった。その翌日より、ルサカでは、前もって連絡していた三菱商事の方々に多大な協力を受けた。

ルサカは非常に美しい都市で、ダルエスと比べればヨーロッパにきたようである。町の道路には、美しい花壇があり、整然とビルが立ち並んでいる。我々は、このルサカをベースとして、これから活動することになる。



ザイル河原頭域概念図



〈ルサカ〜バングウェル湖周辺へ〉

ルサカを後にして、まずは北部への足掛りとなるコッパーベルト地域のンドラという町へ向った。(ルサカよりバスで7時間程)さらにンドラから、30人乗りのプロペラ機にて、マンサというバングウェル湖行きの拠点に立った。マンサより湖までは50Km程である。かの有名なリビングストン氏が、その命を絶つ最後の行程に出て来る、大湿地帯をともなう湖が目の前に迫った地である。

50Km程の道程であるが、たいへんな悪路を小さなトラックに押し込まれて運んでもらった。このような車の少ない所では、人間も荷物と同じである。その上、未舗装の悪路を、時速80Km以上ものスピードで突っ走りなのであるが、不思議な事に、これ程の速さで走ると、起伏もあまり感じる事なくスムーズである。途中、幾台ものえんとしたトラックやバスの残骸が見えた。このスピードでは、一步誤ると、一瞬にしてハンドルを取られて、密林の中へ突っ込んでいくことだろう。

漸く辿りついた湖畔の町、サムフィアは、私の想像と大きく違っていた。日本での計画段階では、人踏末踏の地のようなイメージを勝手に造り上げていた。ここは、ザンビアの人々のリゾート地として利用されているのである。

ここより、湖東方の湿地帯へと進むことにした。湖の対岸まで、現地語で“チョンボ”と呼ばれるボートに乗り、途中3つの島を経由して、チルピアイランドに着く。ここは、発展したザンビアに於いても立ち遅れた地域である。この地にも、キリスト教布教の為の神父さんがいた。このような近代社会より遥かに遠ざかった地で、一夜の宿を与えてくれる教会があることに、不思議な感動を覚えた。

この島は、許可なしに入域することができないうえ、ここよりは湿地帯への足がないとの事で、

仕方なく引き返した。サムフィアより、湿地で暮らす人々の獲った魚を集散する拠点チンサンカへ、トラックを乗り継いで行く。

湿地帯へ入る方法は、手漕ぎのカヌーしかない。そこで、カヌーをチャーターし、船頭を雇い、葦の生繁る湿原へと乗り出して行った。水路は狭く、幅は1mあまりだ。雨季には、モーターボートも運航しているらしいが、この頃は乾季で、かなり水位が下がっていたのだろう。現地の人々の話によると、この湿地帯では、子供が水に落ちワニに食べられることも、よくあるそうである。しかし我々は一度もワニに出会うことはできなかった。

スワンプの奥へと進んで行く途中に、数多くのフィッシングキャンプを見ることができた。乾期の間、わずかな土地に、葦の茎で作った二畳ほどの小屋で暮らしている。生活の全てをスワンプに託し、魚の干物を町に運んで暮らしているのだ。地面も浮いているかの如く、一ヶ所に立っていると、たちまち浸水していく。周りは魚の干物や薫製一色で、ハエが絶えず付きまとい、衛生的には最悪であると言わざるを得ない。

話は前後するが、なぜ我々がこのスワンプを目指したのかを述べておこう。それは、出発前に、京大の文化人類学の先生にお話をお聞きしたところ、古い資料によれば、このスワンプ周辺にピグミーが存在しているのではないかと言うのである。我々はその話の真偽を確かめるべく、現地へ赴くことを決意したのであった。

しかし、結局のところ、スワンプ奥深く入ってもピグミー族は見当らず、そして、我々の想像していたほどの原始生活も見ることにはなかった。しかし、ブワリヤ、ムボンダといったスワンプで最大の島に滞在し、島民から大変な歓迎を受けた。島の人口は約千人ほど。島には電気もなければ水

道もない、車も何の娯楽施設もない。スワンプで獲れる魚と、キャッサバを作るだけの単調な生活を送っている。島民達にとって、ラジオやテープレコーダーを作る日本という国は、魔法の国であり、憧れなのだ。そして、それは遠い世界でしかない。我々日本人も同様に、彼らの事を文明の遅れている人々と、思っているのに過ぎないのではないか。しかし、この一週間ばかりの滞在で、日本とスワンプの人々との間に、理解の橋がかかるような一介を担ったように思う。

この島からもう少し足を延ばし、チャフィエという村まで、カヌーで出かけた。スワンプの中で生活する動物を見るためである。しかし、ガゼールの一群の他は、象の糞以外見ることはできなかった。1泊2日の動物見学を終え、ブワリヤ、ムボンダに戻り、そしてチンサカに帰った。

次の目的は、ルアブラ河沿いの踏査である。ルアブラ河は、ザンビアとザイルの国境を流れる河で、バングウェル湖よりムエル湖へと注ぐのである。ザンビア側は、河沿いに道がかなり整備されており、バスも通っている。

移動に続く移動のため、私はルアブラ河沿いの村カシバにてマラリアに感染した。ホテルのベッドで休んでいたが、熱は増々上がるばかりだ。体中の水分が抜け出たようで、起きることもできない。マラリヤと分かっている、医者もいない所で病気にかかることは、非常に心細いものである。マラリヤの特効薬クロロキンを服用したら、熱は除々に下がり始め、体調は回復に向い、翌朝には平熱近くまでに落ち着いたので、河の偵察を兼ね、ジョンストンフォールを訪れた。河幅は100m〜200m程。滝と言うよりは、段差のある瀬を形成しているという感じだ。瀬は約3kmあまり続く。7月中旬という乾季の真

最中で、雨季に比べ、水位が5mぐらい下がっているとの事である。

この近くにもミッションの病棟があり、未だ遅れているザイル側より、河を渡ってザイル人がやって来るそう。ただ、そこに河があると言うだけで、これが国境であるという実感が全く湧かない。現地の人々もそうであろう。ザイル人は、物資や医者を求めて対岸からやって来る。一方ザンビア人は、特においしいザイル産のビールや衣服を求めて対岸へ渡る。彼らにとって国境は、それぞれの国の代表が勝手に決めた契約であって、生活を区切る境ではない。私は、不思議な境界線を前にして、どうにも割り切れぬ気持ちに陥った。

さらに、ルアブラ河をバスで北上し、ルアブラ河の名の終わるムエル湖へとやって来た。ムエル湖畔の村チェレンゲで、ピグミーに関する情報を得た。現在、この村には一人のピグミー族らしき人が住んで居るそう。昔はこの辺り一帯にピグミー族がいたそうだが、10年程前にザイルの密林へと帰っていったそう。

我々はその一人のピグミーに会いたいと思ったが、あまりにも興味本位だけなので、会わない方がよいと判断した。同じアフリカ人同士でも、部族によってかなり違う。特に小人族のピグミーは他の部族からも蔑まれた存在である。

ムエル湖は、バングウェル湖と並ぶザンビア有数の漁獲地である。我々は朝早く岸に出かけ、獲り立ての魚を目の当りにし、その淡水魚の種類の多さに驚いた。中には珍しい魚もいる。日本で、ピラルクに次ぎ最大の淡水魚といわれる、ナイルパーチを見ることはなかったが、湖には体長2〜3m程の大きな魚がいるそう。漁法は仕掛網が主流であるが、大型の魚はヤリで獲ることもあるという。

この地を、ルアブラ河のザンビア側踏査の終了地点とし、一路ルサカに向けて帰っていった。

ルサカに戻ると、休養を兼ねて、世界三大瀑布の一つであるビクトリア瀑布の見学に出かけた。列車で約12時間の後、リビングストーンという町に着き、ビクトリア瀑布、リビングストーン博物館の見学を終えた。

リビングストーンより西へ足を延ばし、セシエグに着いたが、この辺りは、ナミビア戦線が未だに続いている所である。ザンベジ河を挟んで、対岸はナミビアだ。一般の旅行者は、リビングストーン〜モンゲー間の入域を禁止されている。我々もバスを降りてすぐに、ボリスに呼び止められ、警察所に連行された。ここへ来た理由を何度も尋ねられ結局、翌日には追い返されるはめになった。パスポートを没収され、宿にもボリスが見張っている。我々の安全のためという名目ではあるが、実際のところはどうであろうか。

煩わしい気持ちと、惜念の情が交差して、ルサカへと再び戻った。



ザンビア内の活動を終え、次はザイールである。ザイール国境近くの町チンゴラで、三菱商事の方にお世話頂き、8月初旬に無事入国できた。

ザイール・シャバ州の州都ルブンバシでは、S O D E M I Z A の方々に御協力を頂き、ルアブラ河沿いの村カセンガに到着した。途中のひどい赤土のラフロードには閉口させられた。ルアブラ河のザイールは、汽船が運航しており、それに乗って河を北上する。

ザイールの公用語はフランス語であり、スワヒリ語も通用するが、我々は少しばかりの英語しか話すことが出来ず、このザイールでの活動に大きな障害となるように思われた。ところが、偶然カセンガ行きのトラックを捜している時に、ジョンという青年に出会った。彼は少しばかり英語を話すことが出来、我々との意志がなんとか通じ合える。その彼が我々と行動を共にしてくれたお陰でザイール内の活動もスムーズに行うことが出来た。

これ以後の話は、後の1983年“バテンボ民族調査隊”に筆を託し、簡単に述べる。

ルアブラ河を北上し、ムエル湖北端の村プエトーまで辿り着いた。そして、このプエトーの北部山岳地帯において、ピグミーらしき部族が住んでいるという情報を聞きつけ、奥へと入っていった。プエトーより徒歩で、北へ50km程行ったカサマ村の近くに、ピグミーほどではないが、肌が褐色の背の低い人種に巡り会った。

彼らは、狩猟だけで生活するハンターで、他の部族と比べると、より伝統的な生活慣習が残っているようだった。言葉は悪いが、調査されていない狩猟民“バテンボ”と会見できた。我々にとって、一つの発見であり、目的の一つの果し得たような気分であった。

そして、我々の後続隊として、室沢、横山の両名が彼らと生活を共にし、その記録を残すに至った(次の報告参照)。

わずかな滞在ではあったが、これをもって活動の頂点とし、帰路に着いた。



〈アフリカ行きを振り返って〉

日本に帰って来てから、よく友人達にアフリカについて質問を受ける。しかし、その質問の度に、日本人の持つ“アフリカ”のイメージが、何と断片的なものかとあきれてしまう。テレビの秘境スペシャル、本における様々な探検記と、“アフリカ”が目に着くものと言えば、そのたぐいの何と多いことか。実は私もその一人であった。アフリカのイメージと言えば、暑い砂漠、緑のジャングル、サバンナのライオンや象、また、裸族が弓矢で狩りをしている姿等と、誰もが信じて疑わないだろう。これも確かにアフリカである。しかし、これはわずかな事実なのだ。本当のアフリカは、ゆっくりとではあるが近代文明という波に乗って動いている。都市にはビルが建ち並び、スーツを着た立派なサラリーマンもいる。おんぼろではあるが、トラック、バス等の交通手段もいくらかは整っている。このように「足」が発達し、さらに奥へと近代文明の波が押し寄せていく。

だが、やはり彼ら自身の生活は、古来より本質的な変化はないと思う。昔ながらの土レンガ造りの家に住み、キャッサバやトウモロコシを主食とし、ブッシュと共に生きている。我々の見て来たアフリカ人は、想像以上に近代的であったという事も、実はその昔と少しも変わらぬ状態なのだろうと思う。ほんの少し違うのは、西洋の服を着て、時計をはめ、いくらかの利器を利用していることぐらいだろう。

アフリカでも西と東、北と南では、人種も全く違うし、生活も異なる。部族の数だけでも数千といるだろう。私自身も、広大なアフリカの一部を短期間に通り過ぎた一人であって、私の見て来たものが、すべてのアフリカとは言えない。しかし、以前の平均的日本人としてしかアフリカを考えていなかった私にとって、アフリカ観が改まったことは確かである。

“アフリカ”とは、何と魅力ある大陸なのかということが、体で理解できた。一番感じた事は、良くも悪くも、“生の人間”がそこに居たということである。制約や成績にとらわれず、より人間的に生きる事。我々の忘れた物が散らばっているようにも思える。

近年、アフリカと日本とのつながりは急速に深まり、それに伴って、我々もお互いの理解を深めなければならないだろう。

今までのイメージを抜き棄て真実を直視する。そういう重大な岐路に差掛っているのではないだろうか。

